

# えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑬⑦

以前、本連載で別の甘崎城図を紹介したが、今回は、まさにその象徴ともいえる。甘崎城（今治市上浦町）は、大三島東岸沖の小島全体を城郭化し、南に鼻栗瀬戸、北に安芸（広島県）

国境を望む要衝の海城。戦国時代末期には来島村上氏系の城で、関ヶ原合戦後には藤堂高虎が支城とし、近世城郭化したことでも知られる。

## 甘崎城図（伊予国松山領真崎之古城図）

### 松前と誤認 発音原因か

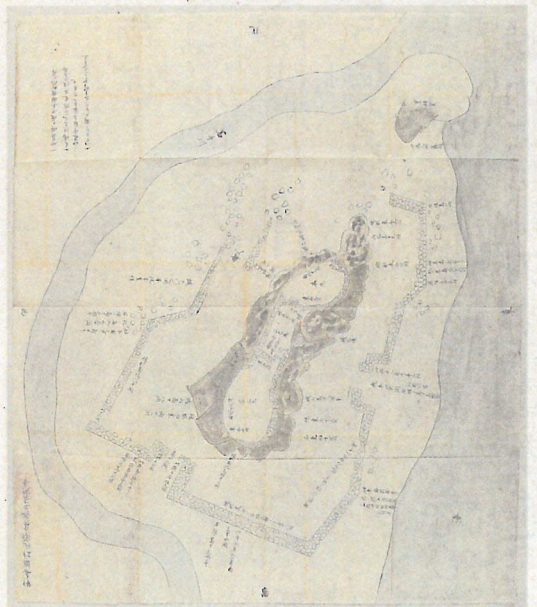
特徴や文字情報などは他の甘崎城図とほぼ一致しているため、本図は松前城と認識されてはいるが、明らかに甘崎城図である。

本図にも石垣や枳形虎口（ますがたこべち）などが見えるが、本図の大きな特徴は、東は海に面し、西には湾曲する水路が通り、しかも水路には「石手川」の文字が見えることである。

大三島沖なのに石手川？という疑問が当然生じるだろう。実は、本図の原題は「伊予国松山領真崎之古城図」で、松前城と認識されているのである。城の外縁に沿

って海へと流れる「石手川」は、まさにその象徴ともいえる。もちろん、実際の松前城では海は西、川は北に伊予川（重信川）があるため、位置関係が全く違う。城の

甘崎城図（伊予国松山領真崎之古城図）江戸時代、県歴史文化博物館蔵



松前城と誤認された甘崎城図の中には、松山藩軍学者の向井家や野沢家がかつて所有したものもある。伊予国松山領真崎之古城図は、松前城が松山藩の前身藩庁というところもあって、関心を寄せやすかったのかもしれない。そこに、「甘崎」と「松前」の発音が似ていることも重なって、誤認を誘ってしまったのかも

は定かでない。甘崎城の往時の姿だけでなく、城絵図の模写と変遷を考える上でも興味深い絵図である。〈専門学芸員・山内治朋〉

〈随時掲載します〉